

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

問題解決／諫早市立諫早幼稚園（長崎県）

夢中になって遊ぶ子どもたちは、葛藤や失敗などに伴う様々な感情を味わいながらも、「〇〇したい⇒やり遂げたい」「どうして？⇒そうか!」と、体験を深めています。思いの実現や学ぶ楽しさ、やり遂げる満足感や納得できる喜びを感じるまで、とことん遊び込んでいます。そうした子どもたちの姿に注視し、寄り添い、保育の工夫を図って子どもたちの成長を支え、捉える保育者も、夢中になって保育をしています。今回は、問題を解決して遊びを進める子どもの事例と保育者の振り返りを紹介いたします。



● 泥団子を作ろう／5歳児

✦ 事例

● 泥団子作りの始まり／5月～7月

砂遊びをしていた子どもたち。友達の「お団子を作ったよ」の声に、「私も」「ぼくも」と、みんなで泥団子作りを始めた。「さら粉（粒子の小さい土）をかけよう」「これをかけるときれいになるよ」子どもたちは、場所を移動して、丁寧に粒子の細かい土をかける。翌日、泥団子を磨く。少し力をかけると、割れてしまう。「あ、割れた!」「私も」結局、前日に一緒に作った子どもたち全員の泥団子が割れてしまった。

「ザラザラだから、割れちゃったんじゃない?」「ピカピカ泥団子はどうやったらできるのかな?」「先生、泥団子の本はある?」などと話し合う。これまで、虫や植物を調べて課題を解決してきた経験から、泥団子の作り方も本に載っているかもしれないと考えたようだ。遊びの本に載っていたことを保育者が伝えると、みんなで本を見る。本には「泥に水を加えること」しかなく、どんな泥がよいのかは書いてない。「写真を見て!ピカピカの泥団子だよ」「これ(本に掲載された磨く前の泥団子写真)と(自分たちの作った泥団子は)違うね」「お砂場で作ったから…」「砂じゃだめなんだよ」「そうだ!泥って書いてあるもんね」「泥見付けをしよう」と話し合い、泥団子を作るための泥を探す。



● 泥さがし～どんな泥がいいのかな?～

「これは、どうかな?」
「さら粉みたいだよ」
「これで作ってみよう」
「畑の土はどうかかな?、本(の泥の色)と似ているよ」
「やってみよう」

幼稚園のいろいろな場所で土を採取し、試してみる。しかし、前回よりは固くできるが、磨く過程で光らずどんどん割れてしまう。「他の泥を見付けてみよう」子どもたちは諦めずに、泥探しを続ける。



● 偶然の発見：雨上がりの砂場～ピカピカの土！見付けた～

梅雨のため、激しい雨が降り続き、珍しく砂場にも水が溜まった。そのため、粒子の細かい土が表面に現れた。子どもたちは「砂場がピカピカしているよ」と、雨上がりの砂場がいつもと違い、太陽の光に照らされて光っている所があることを発見する。

「砂場に泥ができています！」「これで、泥団子ができるかも！」「（泥を）集めよう」「（ザラザラしない）ツルツルの所だけ取ってね」「砂が付いてくる」「頑張ってるツルツルの所だけ集めよう。砂が入っていたら、泥団子ができなくなるよ」「そうだね」と話す。



早速その泥を集め、泥団子を作った。泥がたくさんは集められなかったので、みんなで少しずつ作ることにした。今までと違い上手くまとまる。子どもたちは「今度は、できそうだね」「あれ？コロコロしていると、ひびができた」「水を付けるといいよ」と言い、試行錯誤を繰り返しながら進めていく。「次は、さら粉、付けてみよう」「あとは、明日また磨こう」「本と似ているね。今度は、できそうだね」と話す。

● 考察

太陽に照らされて光っている砂場を発見し、興味をもって近付いて見ると、粒子の小さな土があることを見付けた。触るとこれまでの土と違いツルツルしている（ザラザラしない）。この土なら、泥団子を作ることができると感じたようだ。このように、子どもたちは、自分の身近な環境と直接関わり、自分たちの課題解決に向けて楽しみながら試行錯誤を繰り返している。これが、「科学する心の芽生え」であると感じている。

✦ 保育者の振り返り

● 保育を振り返る

本園においては、「なぜ？どうして？ そのつづやきが、子どもの考えを科学する」を研究主題に掲げ、幼児なりの課題解決の一連の過程を「科学する心」と捉え、研究実践に取り組んできた。事例から捉えた「成果」と「今後の課題」を以下に示す。



研究の成果

- (1) 保育者が子どものつづやきに耳を傾けることにより、新たな発見や驚き、感動を子どもたちと共有することができた。
- (2) 単なる事例の集約としてではなく、子どもの「科学する心」という視点のもと、泥団子作りの一連の課題解決の様子をまとめることができた。

今後の課題

- (1) 本園が示す「科学する心」の考え方は妥当であり、子どもの課題解決を支えるものとなっているのかを引き続き検証する。
- (2) 保育実践を振り返りレポートの作成を引き続き行うことで、子どもの課題解決の様子を検証し、子どもにどのような力がついたのか、その成長の過程を検証する。
- (3) 研究実践を一過性で終わらせることなく、保育者間で今年度の研究成果を共有することにより、次年度以降も引き続き継続・発展させるよう努める。

● レポート作成を振り返る

学校教育法30条2項は、小中学校等で養うべき「学力」について、3点（①基礎的な知識、及び、技能 ②課題解決のために必要な思考力・判断力・表現力 ③主体的に学習に取り組む態度）示している。いわば「アクティブラーニング」であれ、「課題解決学習」であれ、子どもたちが能動的な学習を行うために必要なものであるといえるだろう。

一方、同条文における準用規定が幼稚園には示されていない。しかし、今回本園が掲げた研究主題のように、幼児なりの課題解決の過程を「科学する心」ととらえた時、幼児教育に携わる私たちが、幼稚園と小学校の接続という視点からも、同法30条2項を意識した教育を実践することが大切ではないかと強く感じる。その積み重ねこそが、今、幼児教育に求められている「生きる力の基礎」の育成であり、「質の高い幼児教育」につながると考える。

また、子どもたちの「科学する心を育てる」保育を支援している本プログラムが、幼稚園教育要領が求める「生きる力の基礎」、小中学校学習指導要領が求める「生きる力」の育成を支えていることを、今回のレポート作成を通して実感し、貴重な機会を得たことに感謝する次第である。

最後に、本園の教育そのものが、「アクティブラーニング」であれ「考える力」であれ、やがて義務教育に飛び込む子どもたちに求められている「生きる力の基礎」の育成であると信じてやまない。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」